

幼児の歌唱活動におけるピアノ伴奏の役割と効果 (2)

—幼児教育現場での音楽活動の観察を通しての考察—

*加藤 俊 裕

(2020年2月28日受理)

Roles and Effects of Piano Accompaniment in Singing Activities of Young Children (2) : Study through Observation of Music Activity in Preschool Education

Toshihiro KATO

要旨：筆者が本学研究紀要第50号に投稿した論文の継続研究。今回は実際に仁愛女子短期大学附属幼稚園に赴き、幼稚園での子どもたちの生活の中で、如何に音楽活動がされているかを観察した。また教師にインタビューを行い、音楽活動についての思い、前回の研究紀要論文でのアンケート結果についての意見、保育者養成課程でのピアノ学習についての意見等を聞き、より具体的に今後の保育者養成課程でのピアノ実技指導への提言につなげる。

Key words：幼児教育 音楽 歌唱 ピアノ伴奏 保育者養成

1. 前回研究紀要論文の振り返り

筆者は、本学研究紀要第50号に投稿した「幼児の歌唱活動におけるピアノ伴奏の役割と効果 (1) -幼児教育現場でのピアノ伴奏への認識調査を中心に-」において、保育者養成課程でのピアノ実技指導の在り方について再考するため、まず、歌唱活動の目的や意義、そこにピアノ伴奏がどのように関わっていくべきかを、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」から見直し、次に実際に福井市内107か所の幼稚園、保育園、認定こども園の職員に歌唱活動時のピアノ伴奏についてのアンケート調査を実施し、歌唱時にピアノがどの程度用いられているのか、ピアノを用いるメリット、ピアノ伴奏時に気を付けていることなどをまとめた。

まず、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼

保連携型認定こども園教育・保育要領」を見直すことによって、歌唱活動でのピアノ伴奏の関わり方について、以下のことが重要であると考察した。

- 子どものイメージを膨らませる手助けができるように、その曲にあったリズム感や雰囲気をもった演奏ができる
- 子どもたちの自由な歌を妨げない配慮
- 子どもたちの声域にあった調への移調の能力
- リズムや音程など子どもに未熟な点があった際に伴奏で補助することができる
- 歌詞への配慮
- 曲想によって伴奏形のリズムやアレンジの工夫ができる など

次に、アンケート結果について、私の設定した項目の中では、

*非常勤講師

- 教師が伴奏することによる子どもとの信頼関係
- 正確な拍や音程など、子どもの歌唱における問題点を伴奏によって是正する
- 伴奏におけるアレンジやコードの活用

の3点の重要性において「あまり思わない」「全く思わない」という回答が他よりも比較的多い結果となった。自由記述の項目では簡易楽譜のことや練習時間、全職員がピアノを弾ける必要があるのか、ピアノが必要な年齢層、保育者養成課程でのピアノ学習についての意見があったが、同じ観点についての意見でも相対する意見が多くみられ、現場の保育者の中でも考えが分かれているのがわかった。

2. 仁愛女子短期大学附属幼稚園での音楽活動の見学

(1) 見学校について

仁愛女子短期大学附属幼稚園は園児212名、教員26名の幼稚園で、音楽活動も大変盛んである。ピアノも各教室と体育館に常設されており、いつもどこからか音楽やピアノの音色が聴こえてくる。働く先生にも、高いピアノのレベルを要求しているため、どの先生もしっかりとピアノを弾く技術を持ち、園児が楽しく歌えるように、こどもたちの様子を見ながら伴奏をすることができる。そのため、音楽活動における教師の働きかけかたや、気をつけていること、ピアノ伴奏がどのようにかかわっているかを見学させていただき園として、参考になると考えた。

(2) 見学の方法

2020年2月4日（火）、2月7日（金）の2日間の9:50から14:30までの間の園の様子を見学させていただいた。当初、1日目に園全体を見学し、2日目の見学では特定のクラスを設定し、1日を密着するつもりであったが、この時期の活動が各クラスが入れ替わりで「生活発表会」での歌や合奏、劇などの練習をしていたため、予定を変更して、2日間とも園全体を回り色々なクラスの活動を見学させていただいた。

※「生活発表会」とは、子どもたちが、歌、合奏、劇、ダンス、自由表現等を仁愛女子短期大学の体育館で発表する場。「遊び（学び）をつなげる」ということを大事にし、子どもたちと教員が一緒になって取り組んできた活動や遊びの中から、アイデアを出し合って作りあげていく。

(3) 音楽活動の様子について（生活発表会に向けての活動）

A. 年少児クラス

場面①

年少児3クラス合同で、歌「ふしぎなポケット」と楽器遊び「こどもの世界」を練習。「ふしぎなポケット」はピアノ伴奏にのせての斉唱、「こどもの世界」はピアノ伴奏にのせて、タンバリン、カスタネット、鈴を簡単なリズムでならず。前に出て指導する先生、ピアノ伴奏をする先生、こどもたちの中で補助する先生たちがいる。歌は元気よく歌えているが、少し叫ぶような歌声も聴こえてくるので教師の声掛けが入る。

T(教師): 大きな声でも、聴いている人たちがみんなの声をきいて楽しいな、と思うような声で歌いましょう。こわーい怪獣さんのような声ではなく。ピアノがどんなふうに弾いているか音色をよくきいてください。

場面②

劇と2つのリズムダンスの3グループに分かれて短大体育館にて練習。劇「てぶくろ」では挿入される音楽は教師のキーボード伴奏にて演奏されている。キーボードはステージ正面中央に配置され、キーボードを弾く教師は子どもたちに指示や合図を出しながら、ピアノ伴奏を入れて劇を進行させていく。退場や入場の音楽（色々なこどもの歌を繋ぎ合わせた音楽、左手の伴奏形もほぼIとVの和音でリズムも平易なもの）も教師が演奏する。

場面③

短大体育館にて、年少児3クラス合同で、歌「ふしぎなポケット」と楽器遊び「こどもの世界」の練習。短大の体育館は子どもの声には、広く、あまり

響かないため教師の声掛けが入る。

T：体育館はとっても広くて、お客さんはうしろの方までいる。どんな風に歌うと後ろの人まで届くかな？

C（子ども）：大きな声で歌うといい。

T：でも怪獣のようなお声で歌うのはどうかな？

C：大きいけどきれいな声で、きれいな歌を歌えばいい。

T：みんなが教えてくれた大きい声でもやさしいきれいな声で歌ってみよう。お顔が下向きの人がいるから、お顔をしっかり見せて歌ってください。

B. 年中児クラス

場面①

きく組、さくら組、各教室で朝の礼拝の続きで歌「みんな色の世界」や鍵盤ハーモニカ「ゆき」、劇「ともだちほしいなおおかみくん」で歌う歌を手遊びなどを交えながら歌う。それぞれのクラスの先生がピアノ伴奏をする。

場面②

劇「ともだちほしいなおおかみくん」の練習。音楽にのせて、セリフや歌で物語が進行していく。CD音源によって移動するところもあるが、ほぼ教師のピアノ伴奏によって進めていく。

場面③

劇「ともだちほしいなおおかみくん」とリズムダンス「ジャンボリミッキー！」を短大体育館で練習。劇も、リズムダンスもCD音源を使用する。（劇は、本番は年少児同様、キーボードを弾きながら教師が指示や合図をだすスタイルだが、この時は練習の様子みたり、指導をするためにCD音源を使用。）

場面④

幼稚園の体育館にて、歌「みんな色の世界」と鍵盤ハーモニカ「ゆき」の練習。「みんな色の世界」はピアノ伴奏で練習、「ゆき」はこの時はCD音源を使用（本番はピアノ伴奏）。「みんな色の世界」の実際の楽譜では左手の伴奏形が少し動きの多いリズムや音型なのだが、演奏時は左手はベース音をオクターブで8分音符のリズムで奏する。園の体育館で

聴いている分には十分に元気な声で歌っていて歌詞の内容もはっきりと聞き取れたが、印象としては音程もきれいにとれて歌えている園児が半数程度、中には元気な声でと思って歌うあまりに、叫んでしまい音程を失ってしまっている子たちも結構いたように思う。教師は「短大体育館で子どもたちの声がしっかり聞こえるか心配だが、叫んでしまうのも違うと思うのでどうすればよいか悩んでいる」と言っていた。

退場の際の音楽も教師のピアノ演奏、年少児クラスのものと同じ。

場面⑤

短大の体育館にて、歌「みんな色の世界」と鍵盤ハーモニカ「ゆき」の練習。「みんな色の世界」、「ゆき」共にこの日はピアノ伴奏で練習。「みんな色の世界」について、いったん全部練習が終わったところで教師からの声掛けがはいる。

T：みんな短大の体育館のステージでとても楽しくなってしまうのは良いのだけど、だからといって歌う時に叫ぶ必要はないからね！キラキラの素敵な歌を歌ってくださいね。

「ゆき」はピアノ伴奏にのせて鍵盤ハーモニカで演奏。ピアノ伴奏は短大の広い空間の中でゆっくりになっていきがち子どもたちのテンポによく合わせて伴奏している。

場面⑥

劇「ともだちほしいなおおかみくん」を短大体育館で練習。この時は、年少児クラスの劇同様、ステージ正面中央にてキーボードを用い、教師が伴奏やBGMを演奏しながら、子どもたちに指示や合図をだす。教師は、ほぼ楽譜や鍵盤を見ずに、子どもたちの様子をみながらキーボードを演奏する。子どもの移動や準備の尺に合わせて、ピアノの入るタイミングや間奏の長さを柔軟に調節して演奏している。ただし、楽譜どおりの複雑な音型ではなく、子どもたちの様子を見ながら弾けるように、自分の弾ける形にアレンジして演奏している。

(4) 普段の音楽活動の様子について

全学年通して、1日の活動が音楽と共に構成されている。朝の礼拝の時間には先生のピアノで「仏の子ども」が演奏され、つづいて「先生おはよう」がピアノ伴奏で歌われる。お昼には「おべんとうのうた」をピアノ伴奏で歌い、再び「仏の子ども」をピアノにて演奏。帰る時間には「おかえりのうた」をピアノ伴奏で歌い、「仏の子ども」をピアノにて演奏。空いている時間に、「今月の歌」という幼稚園で決めている歌2～3曲をピアノ伴奏で歌うことが多い。

先にも述べた通り、園での生活が、生活発表会の準備の活動を中心に回っている時期だったため、生活発表会にむけての活動以外のものをあまり見学できなかったが、年幼児クラスで見ることができた印象的な活動を紹介する。

場面① (たんぼぼ組)

ピアノ伴奏にて「ゆきのぺんきやさん」を歌唱。教師はピアノ伴奏をしながら後ろを振り返り、子どもの様子を見ながら弾き歌いをする。

次にピアノ伴奏にて「コンコンクシャンのうた」を歌唱。動物の絵カードを用いて(図1参照)うたの内容を確認し、その際に歌詞の中に出てくるそれぞれの動物のマスクがどんな形なのかを手を使って表現しながら歌う。また、それぞれの動物のイメー

T: たんぼぼ(組)さんがマスクした → C: し
かくいマスク
T: ねずみさんは? → C: もっと小さなマ
スク
T: (ワニの絵カードを見せて) 先生の持つて
る動物は? → C: ワニさん!
T: ワニさんのマスクは? → C: おおきな、
なーがい、ながくて、おおき
い
T: 次は何の動物にする? → C: トラ! お
おきいマスク
T: (1人の子どもを前に誘導し、着ていた衣服
に描かれていた恐竜を話題に出して) 恐
竜はどんな感じかな? → C: 恐竜の様
子を身体を動かして表現しながら歌
う など

ジやマスクの形に合わせた表現での歌唱を促すため、ピアノ伴奏のテンポや音色、後奏の音域などを変えて表現の工夫がされていた。たとえばゾウさんの時はゆっくり、どっしりとした感じで演奏するなど。その後、歌詞に出てこない動物等を登場させ、替え歌を作って遊ぶ。

一通り「コンコンクシャンのうた」を楽しんだ後、ピアノ伴奏なしで絵(図2参照)を見せながら、手遊びと共に「すうじのうた」を歌唱。例えば「すうじの8はなあに? たなのだるま」の部分を取り出して、棚やだるまの説明をする、というように、音楽にのせて数字や物の名前の学習に結びつけていた。



図1 「コンコンクシャンのうた」の動物の絵カード

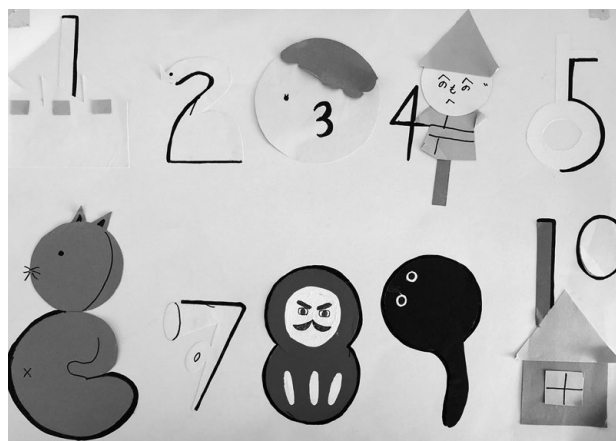


図2 「すうじのうた」の絵

3. 仁愛女子短期大学附属幼稚園教員へのインタビュー

年幼児担当1名、年少児担当1名、年中児担当1名、年長児担当2名、合計5名の教員に協力していただき、2月7日の見学の後、生活発表会への思い

や、見学できなかった普段の活動、また前回の私の研究紀要に関する意見、保育者養成課程で学ぶ学生たちのピアノ学習についての意見を聞いた。

①生活発表会への思い

・年幼児クラス担当

「むすんでひらいて」と「てをたたきましょう」は手遊びと一緒にピアノ伴奏で歌う。「むすんでひらいて」は「おひさまキラキラひかっている」や「ひこうきブンブン飛んでいる」と替え歌にアレンジして楽しみながら歌う。リズムダンスの「あ・い・う・え・おにぎり」はかわいくてテンポも速くない曲でCDに合わせておどる。これは10月の運動会でおにぎりの御面を使った流れからこの題材にした。

生活発表会での活動は難しすぎないように、年幼兒さんならではの気持ちやかわいい表情を保護者の方々に見てもらえるように考えている。発表会の練習はあまり根を詰めてやらないようにしている。年齢的に、ドキドキを継続できないので、なるべく日常の遊びの中で少しずつ継続していき身に着けていくようにしている。

・年少児クラス担当

練習は12月の1週目にいちど歌を聴いてみるところからはじめ、少しずつ、くり返し身につけていった。「ふしぎなポケット」は子どもたちも大好きな歌で、歌の音域もこの時期の子どもたちに合っている。ホワイトボードにポケットをつけてビスケットを出したり、先生のポケットからビスケットを出すの見せ、歌に対してのイメージを膨らませていった。歌詞によって部分部分で表情を変化させるなどの表現は、年齢的に難しく、子どもたちを混乱させてしまうのと、この歳の子たちになると、ステージでの演奏や活動に少し緊張をし始める時期でもあるので、歌で気をつけられることは全体的なことを1つくらいが限界。あまり難しくせずに、「ニコニコ楽しくステージに立って歌う」ことを目標にしている。

劇は、普段の生活のなかで、リトミックで、好きな動物を選んでのなりきり遊びをするのが大好きな子たちなので、合うと思って選んだ題材。お話の絵本を読んでみることから活動を始めた。楽器遊び

の「子どもの世界」とリズムダンスは12月の成道会(年中児保育参観)でもらったお土産がディズニーのパズルで、子どもたちがディズニーに興味をもっていたことから選んだ題材。子どもといっしょに相談して決める内容もあり、皆で一緒につくっている雰囲気づくりをしている。

・年中児クラス担当

歌「みんな色の世界」は歌詞の内容がとても良い。教師が、子どもたちと関わる中で、みんなには一人ひとりちがう色があると気づき、この曲の歌詞の内容と結びついた。子どもたちにこの曲を聴いてもらったところ、とても気に入って、教師の希望と一致した。この曲は運動会の親子競技で使用した音楽と同じロケットクレヨンというグループの曲ということも選択の理由。12月半ばくらいからこの曲のCDをかけておいて自然と覚えられるようにした。歌詞の内容をみんなで深める活動として、「お友達はどうな色だと思う?」ということを考えてみた。また、おうちの人に自分たちの色を聞いてみるということもしてもらった。「〇〇さんはトイレのスリッパをきれいに並べてくれるやさしい色。」「〇〇さんは縄跳びをがんばっている頑張り屋さん色」などの意見が出てきた。教師のピアノ伴奏についても、「最後の繰り返しは和音を厚くして盛り上げよう」や「ラララに入る前はしっかりクレッシェンドしよう」など教師同士で相談し、より子どもたちが曲の世界に入っていけるような表現を工夫している。

鍵盤ハーモニカでの「ゆき」は、季節のうたとして親しみやすいと思って選んだ。リズムダンスの曲も子どもたちの意見で決まった。ダンスはCD音源を使うが、劇はキーボードを使用する。CD音源もあるが、CDだと変な間ができてしまい、タイミングなどはキーボードの方が合わせやすいのでキーボードで演奏する。

・年長児クラス担当

年長児になるとできることが増えて来る。創作劇も成道会での先生の劇のまねっこからの流れで題材が決まった。年少、年中児の劇にはピアノが入るのに対して、年長児の劇にピアノが入ってこないのは、教師の思いとして、先生のピアノや合図で話を

進めていくのではなく、子どもたち自らが話を進めていくということを重視したいから。表現の「忍者幼稚園」もエンゼルランドでの忍者小学校というイベントからの発想。各々がやりたいこと（逆上がり、縄跳び、工作など）を考えて、教師はそれを1つのステージとしてまとめるのを手伝うのみ。

歌は2曲ともピアノ伴奏で歌唱する。「空が空であること」は、譜面上、伴奏パートにはメロディーが入っていないが、それでは子どもが音程をとるのが困難なため、譜面通りではなく、メロディーを右手で奏する形にアレンジする。はじめは絵カードなどをつかって歌詞の内容を考えるが、年長児はより言葉への理解も深まっているので、徐々に歌詞カードから考えていく活動に移行する。合奏の「にじ」は6月から歌ってきた親しみのある曲で、今回は楽器での合奏だが、卒園式の後のお別れパーティーでの歌の発表につなげていく。合奏では、子どもの覚えやすいリズムで、みんなが自信をもって、楽しく参加できるようにしている。技術よりも、みんなで力をあわせて奏でる素晴らしさ、音をあわせる楽しさを大事にする。

全ての活動の共通した思いは、子どもを主体とした活動を大事にしたいということ。

②普段の活動について

- ・リトミックの活動や、ピアノで音楽がはじまったらフープに入ったり、いすとりゲームなどの遊びにもピアノを使用する。ピアノを弾いてあげると子どもたちも気持ちを乗せやすいし、気分の切りかえのアイテムとなる。音楽は、いろいろな活動に関わる。
- ・普段から、それぞれがやりたいことをみつけて、やりたいことをする時間をたくさん確保することを大事にしている。基本的な心の充実があれば、苦手意識のあることでも、やりたいと言ってくれる。
- ・曲決めは、子どもたちから主体的にアイデアが出てきたようにするときと、教師からの提案のときと、状況に応じて。これまでの活動の中で聴いたことがあり、覚えている歌があるとその曲を選ぶ場合もあり、花祭りでの選曲は「あ

りがとうの花」を歌い、花祭りの趣旨と幼稚園の方針とマッチしていて、このような自然な流れでの選択が大事で、主体的に取り組んでいる感覚を重視する。

③前回の研究紀要論文に関して

A. コードネーム、アレンジについて

- ・コードネームは実際に使用する。コードネームやアレンジはできるに越したことはない。
- ・同じ曲を色々な楽譜でのアレンジで用意することは難しい。
- ・コードネームや、IとVのみで良いので伴奏付けを学生のうちに訓練したほうが良い。

B. 簡易楽譜について

- ・簡易楽譜は音楽的に寂しい。『こどものうた12か月』（井上勝義編著、ひかりのくに社出版）の楽譜を使用しているが、この楽譜の伴奏は曲調や盛り上がりが伝わりやすいと感じる。発表会などの時に簡易楽譜の使用を許容してしまうと、果たして子どものためにはそれで良いのかが疑問。
- ・伴奏の音楽性に子どもは影響を受ける。
- ・子どもたちは音が少ないとわかるけれども、それはそれで対応できる。
- ・現場で選ばれる楽譜は子どもにとって大事なことを考えて選択されている。本当に子どもを主体に考えるならば、保育者の方が、子どもたちにとっての大事なことに合わせないといけないのではないか。

C. 拍や音程などを伴奏で是正することについて

- ・初めて歌う歌の導入の際は、メロディーを右手で弾いてあげたりすることはある。
- ・ピアノの技術によってできる先生と難しい先生というと思う。
- ・まずは子どもたちに合わせてあげるのが最初で、そこからテンポなど修正していけるかどうかは学年にもよる。

D. 信頼関係について

教師がピアノを弾くことによって信頼関係は築けると思う。子どもたちは「自分たちの好きな曲をたくさん弾いてくれる」と感じ、教師がピアノ

の椅子に座るだけで、歌いたい歌など希望を伝えてくれるようになる。

E. 練習時間について

空き時間に練習もするが、働き始めるとほとんど練習する時間がない。

F. 全職員が同じレベルのピアノ伴奏ができた方が 良いか

- ・得意、不得意は先生たちにもあるので、きちんと弾ける先生に伴奏をしてもらって、苦手な先生は子どものサポートに回るなどして、全員が全員弾けなくても良いのではないか。
- ・全教師が同じレベルでのピアノは難しいので何とも言えないが、全員弾けた方が良いとは思う。
- ・行事などでのピアノの担当は順番に回してはいるが、やはり大事な場面では若い弾ける先生がすることが多い。
- ・誰しものが急に行事等で弾かないといけない状況は出てくるので、子どもたちのためには全員が弾けるに越したことはない。クラスによって歌える歌の多さに差が出るのもかわいそう。ピアノの苦手な先生も努力をすることによって、苦手でもコツコツやれば、少しずつできるようになる姿を子どもたちに見せることもできる。

G. 年幼児クラスのピアノの使用について

満3歳児くらいの子たちにも、ピアノの演奏を聴かせて、それに対する感想を聞くと答えられる子どももいる。雰囲気や曲想をつけて演奏すると、歌や活動に対する子どもたちのモチベーションも上がる。普段自分を出せない子や、大きな声を出せない子でも、ピアノを用いた表現遊びを通して自信をもち、友達や先生とつながり、声が出てきて、発言も増える。このような活動をするには、楽譜通り弾くだけではなく、アレンジしたり、テンポを変えてみたりということができたほうが良い。

例えば、電気を消した状態で「きらきらぼし」をゆっくり弾いてあげて、子どもたちが眠った真似をしたり、反対に電気をつけて行進曲を演奏して元気に動いたり、といった活動は、子どもたちがイメージを持つ助けとなる。

ピアノを使用することによって、子どもたちが、音や音楽を聴けていることの確認にもなる。

H. 保育者養成課程でのピアノ実技指導について

- ・子どもの歌や園で歌われるような歌をできるだけたくさん弾けるようにした方がよい。
- ・きちんと楽譜を正確に演奏するだけでなく、リトミック的なこと、クラスターやグリッサンドなどの奏法を知り、どのような場面で使えるかを学ぶような内容があっても良いのではないか。
- ・歌うときに音程がとれない学生さんも多いのでソルフージュを強化した方がよい。
- ・短大生の1年間の期間にしては課題が少ない。もっとピアノをした方が良い。子どものうたも「ドラえもん」のような園で使える曲も含め色々な曲を学生時代に弾けるようにした方がよい。伴奏づけもできるようになると便利。
- ・それぞれにとってやりやすい方法でよいが、学生時代に「現場にいて使える曲のレパートリーの習得」と「応用がきくスキルの習得」をしておいた方が良い。即戦力として春夏秋冬のメジャーな曲のレパートリーは必須。
- ・急にピアノを弾かないといけない状況はあるので、人前で演奏する訓練や、人前で弾くイメージも必要。

4. まとめ

生活発表会に向けての活動を含む、園での音楽活動の中では、無伴奏、ピアノが使用されるもの、CD音源を使用するものとあり、状況に応じて、その場にあった方法を選択していた。その中でも歌唱活動を中心に、劇など、教師がピアノを演奏する場面は多岐にわたっていた。しかもそのほとんどが子どもの様子を見ながら、指示を出したり、合図を出してピアノの演奏もしなければならぬため、かなりの余裕をもって演奏できなければならない印象をもった。

また演奏する曲数も歌唱活動の曲だけでなく、劇中に使用する音楽なども含めたくさんの曲を弾けなければならない。さらに、生活発表会の本番でピア

ノ伴奏をしない先生でも、クラス単位で空き時間に歌うため、ピアノ伴奏を弾けなければならない。

年幼児クラスでの「コンコンクシヤンのうた」の歌唱活動では、動物の様子を子どもたちに歌い方で表現させたり、マスクの形を手の動きで表現させながら歌うために、教師がピアノ伴奏を小さく弾いたり、左手の音を厚くしたり、重たい感じで弾いたり、音域を変えたりなど子どもたちの感性に働きかけるための工夫をして演奏をしていた。そのような活動を可能にするためには、教師自身が感性豊かなピアノで音楽を表現したり、アレンジしていくスキルもとても有効であるとわかった。

一方で、本来の楽譜通りに正確な演奏をするよりも、先生達がそれぞれ弾きやすいようにリズムを単純にしたり、音を減らして弾いている様子（しかし、音楽の厚みを損なわないような工夫もしながら）も多くみられた。それは、子どもの様子を見て、柔軟に反応していくためと、少ない練習時間、時には初見でも対応できるようにするためであろう。

これらのことから、現場で求められるピアノの能力について、以下の3点にまとめることができる。

- | |
|---|
| <p>①子どもの様子をしっかりと見ながら、それに反応できるだけの余裕を伴奏しながら持つことができる</p> <p>②曲想を表現したり、音域やリズムや和音を変えて子どもの表現を助けられる</p> <p>③できるだけ短期間で伴奏を弾けるようにし、弾ける曲の数もできるだけ多くする</p> |
|---|

ただ、教員になると練習時間がないという意見が多かったため、このような能力は、学生時代の授業で身につけるのが最適であろう。

では、現在の本学の「ピアノ基礎演習」の授業が、このような能力を育てることができる授業構成や内容であるかを考えると、やはり再考の余地があると考えられる。現在、グレード1の初心者に課せられる課題は一律で、バイエルの原書番号105番までの抜粋55曲と「黙想」、仁愛女子短期大学附属幼稚園の実習曲5曲と弾き歌いの自由課題2曲である。まず、学生の様子を見てみると、初心者の中にも各々

に能力の差や得手不得手があり、同じ初心者だとしても、一括りにして同じ課題を課してしまうのは少々乱暴と感じる。そして、バイエル100番台はリズムも音型も初心者には複雑なものが多く、結局たどたどしく弾いて、渋々合格させることがほとんどであった。

保育者養成課程の特に初心者の学生にどの程度リズムや音型に困難を伴う課題を課すかはもう一度よく考えなければならない。果たして複雑なリズムや音型を伴うバイエル100番台までを課題とすることが本当に適切なのだろうか。そもそも子どもの歌にそれほどの複雑なリズムや音型が要求される伴奏は少ない。

それならば、バイエル課題はより基本的なものに限定し、読譜や奏法の基本的なことを徹底して定着させ、時間をかけて丁寧に指導し、また余裕ができた時間で上記の能力を訓練できる課題を取り入れたほうが良いのではないかと考える。例えば、もっと単純な曲を数多く読んだり、ソルフェージュ、IとVのみの伴奏付け、コードネームによる伴奏付け、こどものうたのレパートリーを増やすといったことに使える時間が増えると良いと考える。

また「ピアノ基礎演習」の授業で学生に伝えるべきことの中には、実際、幼稚園のピアノや音楽を用いる活動のなかで、問題となること（子どもの発声の指導の仕方など）や、あらゆる活動におけるピアノの可能性（クラスターやグリッサンド、伴奏付けなど）も伝えていく必要があるのではないかと考える。他の音楽分野の授業で既に教えていることと重複するかもしれないが、「ピアノ基礎演習」は個人指導のある唯一の時間なので、各々がしっかりと実践することができる。ピアノの色々な可能性を知ってもらったり、広い視野で幼児教育者として音楽やピアノを用い何ができるのか、どのように子どもに教えれば良いかなどを問題提起する場にもしていきたい。他の音楽分野の授業と密に連携し、内容も行き来できるものである方が学生の音楽能力の向上のためにも効率が良いのではないかと考える。見学の際、印象的だったことの1つに、「こどもたちの歌声が短大の体育館では届かないのではないかと心配を複

数の先生方がもたれていたことである。子どもへの発声の指導や、無理をさせないでしっかり言葉を伝え、音程をきれいに歌うにはどのようにすればよいか、ということ子どもたちに伝えるのは簡単なことではない。教師もどのような声掛けが適切かの判断が難しい場面がたくさんある。このような現場ならではの視点は、学生の弾き歌いの指導の際にも提示し、考えさせることが必要である。

今回の見学は、仁愛附属幼稚園のみで、生活発表会に向けた活動が主であったため、今後は普段の活動時や、他の園の様子も見学し、より保育者に求められる音楽能力とピアノの能力を考えて行きたい。

参考文献

- 加藤俊裕(2018)『幼児の歌唱活動におけるピアノ伴奏の役割と効果(1)-幼児教育現場でのピアノ伴奏への認識調査を中心に-』仁愛女子短期大学研究紀要第50号 p117-124